

第5回 J-GBF 行動変容ワーキンググループ
議事要旨

1. 令和5年12月15日(金) 14:30~16:00

2. 開催方法: オンライン (Webex)

3. 出席者

(座長) 大阪大学 特任准教授

佐々木 周作

(専門委員) 国立環境研究所 生物多様性領域 主任研究員

久保 雄広

(専門委員) 株式会社バイオーム 代表取締役

藤木 庄五郎

(J-GBF 委員・関係者・一般傍聴者: 112名)

国際自然保護連合日本委員会 (IUCN-J)

公益財団法人 日本博物館協会

公益財団法人 山階鳥類研究所

Japan Youth Platform for Sustainability

NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J)

生物多様性自治体ネットワーク

消費者庁

文部科学省

農林水産省

林野庁

4. 開会

ご挨拶 環境省 自然環境局主流化室 浜島 直子 室長

・J-GBF 行動変容 WG は今回で5回目となる。いつも活発な議論をいただいている。

・これまで主に消費者、生活者に焦点を当ててきたが、毎回、参加者に企業の方が多いので、今回は企業内の行動変容についても取り上げることとした。

・ご発表いただく正木先生とアサヒ飲料の共同研究については、とある会でご発表を伺い、これは企業の方々の参考になると思い今回ご依頼した。

・ぜひ、活発なご議論をいただきたい。



5. 議事

(1) 行動変容 WG の今年度の活動方針について

①前回の WG の概要と今年度のスケジュール

資料2「行動変容 WG の今年度の活動方針について」事務局より説明

②行動変容に関する環境省で実施予定の業務について
資料3「因果分析を用いた行動変容の促進手法に関する検討」について、

いであ株式会社 主任研究員 幸福 智氏より説明



(2) 生物多様性の主流化に関する活動事例の共有
大阪大学 特任准教授 佐々木周作氏

国立環境研究所 主任研究員 久保雄広氏

株式会社バイオーム代表取締役 CEO 藤木庄五郎氏による
共同プロジェクト

「生きもの情報のコレクションと金銭寄付のマッチング」
について、佐々木座長より報告



【質疑応答】

(浜島室長)

・最初に想定として、寄付インセンティブが効くのではないかとということで調査を実施したが、前段では想定と違う結果となった。これは海外も含めた先行研究との矛盾はあるのか？

(佐々木座長)

・金銭インセンティブだけの効果を確認したドイツの研究はある。寄付インセンティブとの比較した調査については、この分野ではこれが初めてではないかと思う。

・ドイツの研究では同じように投稿が増えたが、特定の種ばかりが増えて、全体の投稿の種の多様性が損なわれた。コンテスト賞金のような形だったので、とにかく投稿できるものをたくさん投稿したという行動特性となったのではないか。

・今回ある種の投稿が増えた点は似ている。それに寄付インセンティブを入れると投稿される生物の種の偏りが無い形で増えるのではないかとと思われる。

(3) 生物多様性の主流化に関する話題提供

東京女子大学 専任講師 正木郁太郎氏

資料4「企業内の行動変容につながる研究の使い方・作り方」ご発表



(アサヒ飲料 松本氏)

・今回 CSV について、共同研究をさせていただいた。
・社会貢献活動をする、社員のモチベーションやエンゲージメントが高まることを発見し、それを今回の調査で検証した。

・社内の行動変容として振り返ると2つのことをした。社員に向けて活動への参加を呼び掛ける。上層部に向けてそういう活動の価値を見出してもらう。

・社員の巻き込む際には、楽しい、嬉しいという感情を大切に。社員が前向きになるために、感謝されたり、ほめられるたりするフィードバックをもらえるようにしている。

・上層部を巻き込む点では研究を活用させていただいた。上層部も楽しい現場に連れて行って気持ちの醸成はしていたが、予算化、理論構築については難しかった。そこで先生のデータを見せて、やっぱりこれは意味があったねという腹落ちをさせた。

・最初に感情の醸成をしておいて、最後にデータを示すことで結果的に効果があった。



②アサヒグループジャパン株式会社

コーポレートコミュニケーション戦略部

戦略グループリーダー 火置恭子氏

資料5「アサヒグループ社有林“アサヒの森”の生物多様性取組み」ご発表



【質疑応答】

(参加者)

・正木先生のお話にあった CSV 効果を研究したというのは、今ご発表のあった森の体験プログラムと関係しているのか？ どういう内容を題材にしておこなったのか？

(松本氏)

・アサヒの森の活動は入っていない。アサヒグループの中の、飲料会社の中での CSV 活動。環境に良い活動として、ペットボトルを軽量化する、ラベルをなくす、物流効率を良くする、工場の周りの森林保全活動、健康に良い飲料の開発、次世代育成など。

(久保委員)

・アサヒの森の活動が興味深い。当初コルク不足に対応するために、自社で森を持っているということだったが、過去の経緯を踏まえて、今後どういう方向で生物多様性の話が進んでいくのか。

(火置氏)

・本日は社員の活動を中心に話しをしたが、アサヒの森自体は自然資本の価値を定量化していく、CO2の吸収、水の寛容を定量化、生物多様性の価値を定量化していく活動を引き続きやっていく。

・生物多様性についてはTNFDなどがある中で、地域を巻き込んだ形で考えていきたいと思っている。

・全国で森林保全活動を工場周辺でやっているの、そこに関してもアサヒの森で培った定量化のノウハウ等を活かし、自然資本の貢献度を見える化していけると良い。

(佐々木座長)

・社員の行動変容を広げる際に、コロナ禍で対面での活動できない状況で工夫されたこと。また、こういう活動は本社勤務の人には派生しやすいが、地方の勤務、工場勤務の方まで広げるために、どういうこと考えているか。

(松本氏)

・私が実践していたのは全社の活動ではなく、研究所サイトの限られた活動だったので、リモートだから困った、何か特定のアクションをしたことはなかった。

・リモートか否かは大きいと思う。楽しさ、うれしさは、直接見て楽しい、直接ありがとうと言われる、驚きを感じるのは大事なので、効果はリモートとリアルでは違うと思う。リモートであれば、それらがもっと伝わる工夫を考えないとならない。

(佐々木座長)

・働き方がこれから変わっていくなかで、生物多様性が企業にとって、どういうプラットフォームになっていくのか、将来像を想像しながらやっていく必要がある。

(松本氏)

・先ほどインセンティブの話で、寄付と金銭のインセンティブの比較があったが、寄付も寄付した人の笑顔が見えるなど、フィードバックがあるといいのではないかと思った。

(4) 企業の行動変容に向けた意見交換
資料6 「企業の行動変容に向けた意見交換」
について事務局より説明

【意見交換】

(佐々木座長)

・正木先生から、企業や団体として行動を変えていくには、つくる段階からパートナーシップでやっていくのが大事というメッセージをいただいた。行動変容WGでも、いろいろなティップスを紹介したり、今、事務局で海外や先行事例から様々な事例を整理しているそうだが、企業やNPO、自治体で、どうやって使ってもらえるか。むしろ事例を整理する段階から、企業の方に意見を聞いてみるのが、公開した後に使ってもらえるのではないかと思う。

・ここでのお悩み、質問をお受けするが、行動変容WGがどんな風に貢献できるかも含めてご意見いただきたい。

(藤木委員)

・企業の行動を変えるには、今日のご発表者のような熱意を持って動く人をどう作るか。国全体として、企業といっても構成しているのは個人。企業でもできることをやっていこうということを促していくことが効果があると感じた。

・経営者という言葉が良く出てきた。私自身の実感としてもあるが、生物多様性に取組むとき経営者を無視してできることはない。経営者にどう差し込むか。データの話しもあったが、どういうデータを見せて経営者を納得させるかを考える必要がある。そういうとき、国が出しているデータを参照することが多い。環境省がこう言っている、あるいは他の企業が環境省から表彰されていますよ、とか色々な説得の方法が、そのための素材が欲しい。

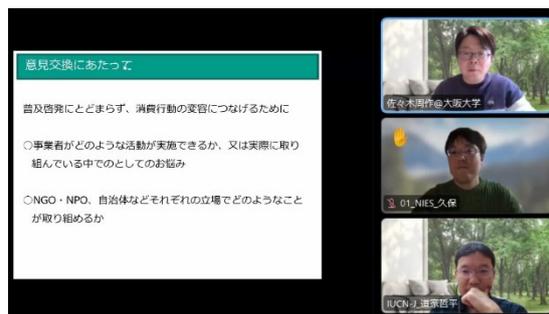
・環境省として行動変容を促すための打ち手を考えていく。経営者、担当者にどういう活動、行動を促していくか考える必要がある。

(佐々木座長)

・企業の行動変容を上手く促すためのイベントやデータがあると良いということですね。
・火置さんや松本さんが活躍されているという話は、前半にあった就職希望者のアンケート、企業の生物多様性とのマッチングにも関連するデータになると思う。

(IUCN-J 道家)

・一つ一つの事例はとても参考になったが、全体像、国家戦略上の位置づけを見ると、まだパーツがうまく繋がっていかない感じを受けた。調査因果分析の結果で、ネガティブなトライアングルがどう克服されるのか。企業の中の経営者、従業員というところと、消費者もま



だ私の中で繋がっていない。

・一方で経営者の行動変容を促す、ネイチャーポジティブを目指す宣言の推進が J-GBF の活動として進んでいる。今後、ネイチャーポジティブ、国家戦略を目指していくためのナラティブ、J-GBF が進めようとしている、実証しようとしているストーリー、仮説のようなものが繋がるようになっていくと、そのストーリーを NGO・NPO の中でどう支えたり実証するか、自治体の中でどう実現するか。ロードマップというか、トランジションプランというか、多くの人を変えていくための全体像がクリアになっていくと良い。今日の段階では、頭の中で繋がっていないのでモヤモヤしているところ。

(佐々木先生)

・私も同じ感想を持っている。

・因果分析は、新しいデータをとっていくことをイメージしていない。個人が消費行動をとったときに、どういうパスをとって生物多様性、ネイチャーポジティブに繋がっていくか、要因のつながりを整理していくことをイメージしていた。

・特定の商品、材を使って実証的にするのもいいが、既に色々な取組がある中で、それぞれをどういうストーリーでつなぐのか、パスをうまく描く整理を並行してやっていただきたいと思った。

(久保委員)

・国家戦略の中で紐づけなければいけないネイチャーポジティブや OECM の話題が今回は出てこなかったのが、どの方向を向いた行動変容なのかが、少し曖昧だと思った。

・ネイチャーポジティブのエバリエーションも出てきたので、行動変容とネイチャーポジティブが、どういう風に繋がるのかを事務局で整理して欲しい。

(道家氏)

・IUCN では、現在、種の保存とコミュニケーションの分科会で、行動変容の委員を募集して立ち上げようとしているところ。

・IUCN の中でネイチャーポジティブの定義、定量化を出している。ポイントとして、あらゆる人々が変わらないといけない。現在、多くの方はネイチャー・ネガティブ。それをひとつひとつ変えていかなければいけない。

・今日の議論は、何が課題なのかが、日本の自然とのかかわりの中で抜けていて、でも社会変容とか、ビジネスとしての行動変容をどうしていくかの議論になっていたかもしれないと感じた。

(佐々木座長)

・我々のグループの課題として、環境省、研究者にどういうリクエストを出していくか。環

境省と事務局で、次回、今後に向けて検討していきたい。

(正木先生)

・私自身は生物多様性が専門ではないのだが、先ほどコメントをいただいたように、全体としてどういうストーリーか、大きな目標に向けて個別の行動につなげていくときに、自分の立場だったら、少しだけやってみようとか、事例として検証してみるなど、いろいろな方々にコメントをいただきながらやっていくこともありだと思ふ。

・ワーキングの参加者の方にも色々な方がいるようなので、こういうことをきっかけにして、一緒に第一歩としたできないか考えるなど、それぞれの立場で少しずつやっていけるプラットフォームの位置づけも果たせるかと思つた。

・重要なテーマなので、ぜひ、色々なところと組んでやってみる、自分事に落とし込んでやってみると、企業も消費者も、行動変容になっていくのではないかと思つた。



(佐々木座長)

・国全体として取り組んでいくためには、排他的になってはいけないので、いろいろな人に入ってもらい、ご意見をいただきながらやっていくことが大事。このワーキンググループの名前が、生物多様性やネイチャーポジティブではなく、行動がキーワードになっているので、私自身もいろいろなステークホルダーも入っていただいている。本日いただいたコメントを受けて、生物多様性というテーマと馴染ませていくことが必要だと思ふ。

以上